

旧友と辿った思い出の旅（危機一髪）

伊藤新道であわやというシーンを脱して、ようやくの思いで稜線に出た。

そこは鷲羽岳（わしばだけ・二、九二四^米）と三俣蓮華岳の中間に位置する鞍部で、山小屋があった。三俣蓮華小屋、現在の三俣山荘である。小屋の人と話を交わしたが、その方かどうか分からないが、小屋には例の伊藤正一さんが居られたはずである。

僕らはそこから数十メートル離れたハイマツ帯の脇にテントを張った。テントは二〜三人用、布製モスグリーンの米軍放出品。

この夜、

まともや僕らの人生で最も危険な目に出会うことになる。

深夜一時を過ぎただろうか、雨混じりの強い風にテントがばたついて、なかなか眠れない。隣の保田君はどうやら寝入っているようだった。

僕はしばらく、まどろんでいたように思うが、何か足音のような響きが地面からかすかに伝わってくるのに気が付いて、すっかり目が覚めた。耳を澄ますと、その響きがどうやら大きくなってくる。

まさか？

夕方三俣蓮華小屋の人から、最近熊の出没があるから気を付けるようにと注意されたばかりである。この辺ではツキノワグマが冬眠前に稜線へ出て、登山者の捨て置く残飯を漁りに来ることがあるという。

テントの裂け目！

その熊が近づいている！このテントに来る？

そう思った瞬間、一気に心臓の鼓動が激しくなって、ドクンドクンとつるさいほどに耳の鼓膜を圧倒しはじめた。

脇では保田君がすっかり寝入っている。

やがて、熊とおぼしき息遣いも聞こえるようになって、それは間違いない、このテントが狙いであることをはっきりと悟った。

恐怖で頭が混乱した。

それでも、ヘッドランプを頭に付け、確か右手に斧、左手にコッヘルだったか音の出る食器を持って、足で保田君を蹴って起こす姿勢をとった。この辺までは後で思い起こすと、自分ながら結構落ち着いて用意ができたと褒めたい。

そして、とうとうその主は荒々しい息遣いを発しながらテントの周りをうろつき出したようだ。遂には僕らの頭の上でゴウゴウという鼻息。頭の後ろに置いたザックの上には夕食時の残飯が載せてあった。その臭いに引き寄せられたのだ。僕の動悸はいよいよ激しく心臓が口から飛び出しそうだった。

突然、頭の上でバシツという大きな音。何か裂けたようだ。テントが裂けたのだ。テントの支柱も傾いた。

咄嗟に保田君を蹴りながら、ヘッドランプのライトを点けた。破れたテントの裂け目から、ライトの光の中に……

カツと見開いて血走ったような巨大な眼！

自分の目の前に獣の眼。駄目か！と思った一瞬、何とその物は地響きを残して去ってくれたのだ。

助かった！

(昨日から今朝にかけ、続けて二度の命拾いとなったことになる)

保田君は、テントがつぶれて、ただ事で無い僕の様子にびっくりするばかりであつたらう。事の仔細を伝えようとする僕の話が要領を得なかつたに違いない。震えていて口が回らなかつたと思う。それでも、何が起きたのか、どんな危険があつたのか、二人でテントの支柱を正しながら、顛末を伝えるのに時間を要したはずだ。

まだ安心が出来ないため、夜が明けるまで、斧を抱いて二人でまんじりともせずじっとした。(後日、留守居役の下赤君が「抱き寝の鉈」と呼ぶ)

襲つて来たその主はヘッドランプのライトに怯んで逃げたのだ。予防するという点で、音を出したり明かりを点けておくなり、人間の存在を予め知らせておくべきであったかも知れないが、近年逆に人間を知った熊をおびき寄せることになる例もあるという。

最近知り得た撃退法では、一番確実に効果的なのは唐辛子を仕込んだ熊スプレーで、鼻先で噴射すればギャーと逃げるそうである。他に確実なことは無いそうだ。また昼間、十^ト以上離れていたら、熊は目が非常に弱いため、じっとして立木のように装ったり木に隠れたり木に寄り添ったりした方がよいという。また人間であることに気付かれた近さでは、荷物なり棒を振り回して大きく見せるのも威嚇効果があるとか。目をそらしたり背を向けては絶対駄目。熊との遭遇歴三千回というツキノワグマ研究所理事長の談話である。

ひるがえって、僕らは予防なり準備なり何の心得もなく、野生動物が横行する危険な自然界にのうのと立ち入ったことになる。

ただ、夜間突然のライト直射は熊スプレー並みに効いたようだ。

空が白々となつて、テントから恐る恐る顔を出した二人は後ろを振り向くこと無く一目散に三俣蓮華小屋へと走った。

小屋に駆け込んで、すっかり安心！ホツとしながら事の仔細を話した。小屋の人からは熊の仕業に間違ないという。

念のため、僕は熊の身体全体を見ていた訳でなく、見たのはカッ^ツと見開いた獣の大きく光った眼のみ。

(続く)